

新年のご挨拶

新年おめでとうございます。

昨年中は「日本リザルツ」の活動を陰に陽にご支援、ご指導いただきありがとうございました。世界大不況という厳しい情勢の中で、2009年を迎えることになりました。経済活動は低下し、巷に失業者が溢れ、その急速な回復は期待できそうもありません。落ちこぼれてきた人々を救う網が十分に張られることは期待できず、貧困者がさらに増加することが予想されます。このような状況は、結核のような慢性疾患にとっては、その勢いを取り戻す絶好の機会になります。2009年は「日本リザルツ」にとって、なすべきことがあまりにも多い年になりそうです。

「日本リザルツ」の仕事の原点である貧困対策は、2009年にはさらに重要性が大きくなるものと思われます。グローバル化が唱えられ、企業の国際競争力の強化が強調された結果、日本企業の一つの特色であった生涯雇用、年功序列型の給与体系は消滅し、正規外の雇用が増えてきたところに今回の大不況です。真っ先に職を失うのは正規外の労働者であり、その多くは寮も追い出されて、住むところもなくなりそうです。その中の多くは「ホームレス」になり、大都会の一隅に住み着かざるを得ないことになるでしょう。「日本リザルツ」としてこのような事態にどう対応するか、真剣に緊急に検討すべき課題です。

ここ一、二年活動を強化してきた結核対策では、「日本リザルツ」も有力なメンバーの一つである「ストップ結核パートナーシップ日本」が2007年11月に結成され、昨年は7月に国際セミナーを行うなど、活発に事業を展開してきました。その際に発表した行動計画は、公約を守るためにもぜひ実施せねばなりません。当方に期待されるのは、主としてアドヴォカシー活動であると思いますので、関係する他の団体との連携を強化しながら、活動を展開する必要があると思います。

その一方で、心配なのは国内の結核問題です。不況に伴う社会情勢の悪化によって、通常の結核対策の手が届きにくい階層が増えます。そこは結核を増やす絶好の培地です。発見の遅れが新しい感染を増やし、不確実な治療は多剤耐性結核発生をもたらします。例えば新宿のように、多くの問題を抱える地域を、保健医療特区に指定して、保健所自らが結核の診療を行えるようにすることを含む貧困層対象の保健医療福祉対策を提唱し、モデル地区として実施すべき時期にきているのではないのでしょうか。

新しい年に、「日本リザルツ」に期待されることはあまりにも多いと思います。微力ながら、職員一同力を合わせて、難しい問題に取り組んで行きたいと思います。ご支援をお願いします。

日本リザルツ理事長 島尾忠男

1. 今月の活動

【WHO神戸センター所長との会見】平成20年12月15日、日本リザルツ事務局とストップ結核パートナーシップ事務局から三名がWHO神戸センターを訪問し、クマレサン所長からWHO神戸センターの主な仕事内容や今後の展望などについてお話を伺った。また、平成20年7月の「国際結核シンポジウム」で発表された「ストップ結核アクションプラン」の目標である「年間160万人強の結核による死亡者の数を年間16万人(10%)減らす」にはどのような行動・活動が必要かについて、氏から、「日本が過去45年間にわたり、結核対策において国内外で目覚ましい実績をあげてきたことは世界的にも高い評価を受けているが、今後、世界規模での結核制圧に成功するには、より革新的な戦略・企画・実施方法で取り組む必要がある」との意義深いアドバイスをいただいた。また、「その手がかりとして、まず近隣のアジア5カ国ぐらいを対象にパイロットプロジェクトを行い、その成果を土台に5ヵ年計画を立ててみるのはどうか」との、具体的な提案もいただいた。

【国際連帯税のアピール、GIIINZのコンサートで!】12月23日、「GIIINZ」のクリスマス・チャリティ・コンサートのご招待を受け、参加した。バンドマスターである林芳正参議院議員が演奏の合間のトークで「国際連帯税 - 国際航空券税」をしっかりとアピール! 「政治家として、まだまだやるべきことがある...国際連帯税がそのひとつ」と熱い思いを語られた。

【国際連帯税の勉強会】12月26日、オルタモンドの高木晶弘氏をリザルツのオフィスにお迎えし、「革新的資金調達メカニズム」と国際連帯税、その実現のための「日本版ランドー委員会」創設の提案内容などについて、充実した勉強会を行った。【新聞・テレビ】平成21年1月5日の日本経済新聞に結核に関する記事「結核の脅威 都市に潜む」が掲載され、同日のTBS「みのもんたの朝ズバッ！」においても紹介された。またテレビ朝日の1月8日昼のワイドショー「スクランブル」で「派遣村で結核患者、都市圏で感染拡大の脅威」というタイトルで国内の結核感染について報道された。

2. リザルツ マンスリー ミーティング

12月のミーティングは、「国際保健全般とそれにかかわる用語の使用法」というテーマで開催した。国際保健分野の政策に長年かかわってこられた産経新聞編集委員の宮田一雄氏から、エイズ流行の背景にある政治情勢や「エイズ撲滅」という誤った言葉の使い方が如何に感染した人々を傷つけているかについてお話頂いた。また、結核予防会結核研究所所長の石川信克氏より、チェンナイでのHIV陽性者との会談の話をまじえ、当事者の視点にたった疾病対策が大切だとコメントを頂いた。アドボカシーを行っている我々は「制圧」や「根絶」などの言葉の使い方に留意し、常に患者の方の気持ちを忘れてはならない、と改めて考えさせられる会となった。

今回は、1月16日(金)18時から、参議院議員の川田龍平氏をお招きし、広く人権問題等について意見交換をする予定。詳細は、日本リザルツのホームページをご覧ください！

3. ストップ結核パートナーシップ日本(STBJ)の活動

新しい結核薬が5年以内に導入される可能性が高い。大変喜ばしい見通しであるが、一方で慎重さを求める専門家も多い。一歩間違えば、すべてが台無しになるケースも考えられるからだ。昨今話題の薬の効きづらい多剤耐性結核は薬の使い方を誤ったために出てきたものだが、これは医師や患者の責任と同時に、WHOの政策に失敗を挙げる声も大きい。新しい薬が導入される場合には、新たな複数の薬を飲み合わせる標準併用化学療法を確立しなければならないが、円滑に進められなかった場合には、早々に新薬に耐性を持つ結核が出現してしまいかねない。

新薬開発には大変な時間と費用がかかるが、その上に結核薬の場合、価格が低いため製薬企業が独自に開発を進める経済的インセンティブを持たない。つまり現在の新薬候補は、まさに虎の子ともいえるべき、貴重な人類の資源であり、グローバル公共財である。今後の国際的な医療政策の先導についてはWHOに期待が高まるが、一方で最近の新薬開発をリードしてきたアメリカ中心の開発組織やアメリカ当局と、意向が交錯する。国際的な公共性を優先する政策が実現するよう、注視していきたい。

4. パートナーの活動: (特活)フレンドシップ 芝田じゅんさん

12月20日:女子大生が主催によるイベント【VENUS】(東京/六本木)で白須紀子リザルツ事務局長が結核・エイズ活動「ウィンストン・ズル」氏の手記を発表し、ストップ結核&HIV/エイズを訴えた。(来場者500人)

12月21日:(特活)全国骨髓バンク推進連絡協議会が主催する【骨髓移植10,000例・さい帯血移植5,000例 ありがとうキャンペーン】(東京/銀座)の街頭活動に参加し、TBSで報道された。

12月24日:(特活)フレンドシップが主催するイベント【KRISTKIND】(東京/渋谷)で、啓発ブースを設置し、若手アーティストとともに、ストップ結核&HIV/エイズを訴えた。(来場者500人)

【お知らせ】Heart Art in TOKYO 2009「第12回エイズチャリティー美術展」で(特活)フレンドシップ ボランティアの芝田じゅんさんの2作品が入選し、国立新美術館で展示されますので、是非、ご来場ください。(入場無料)

開催会期:2009年1月22日(木)~2月2日(月) 10:00-18:00 開催会場: 国立新美術館 (港区六本木7-22-2)

当マンスリーレターに関するご質問・ご意見などございましたら results.japan@gmail.com までご連絡ください。

ご寄附のお願い:世界の貧困・保健問題の解決のため、懸命に政策提言活動を行っております。持続的な活動を続けるためにご支援をお願いいたします。郵便局の払い込み用紙に、口座番号00170-9-581459(加入者日本リザルツ)とご記入ください。